

## 屋久島生態系モニタリング

### 愛子岳東側斜面の植生調査 平成13年度調査

・標高600m地点  
 プロットは、愛子岳登山道に接する地点に設け、北西方向にセンターラインを設定した。平均傾斜35度の尾根の西側急斜面で、地表には礫岩がほとんどなく、適湿な黄色系褐色森林土壌である。プロットの階層区分状況は、高木層では、優占種スダジイ、樹高6~11m、植被率30%、亜高木層では、優占種サクラツツジ、樹高3~6m、植被率90%、低木層では、優占種ハイノキ、樹高1~3m、植被率30%、林床層では、優占種ヤクシマアジサイ、樹高1m未満、植被率30%となっている。

この林分は、スダジイからサクラツツジ群集で、高木層から亜高木層にかけてサクラツツジノキ、常緑広葉樹が比較的に出現している。低木層・林床層（草本層）にはハイノキ・ヤクシマアジサイが多く、個体数は少ないがウラボシ・クロバヤシの亜高木やアデクノミドリも出現する。

## 調査・研究の連絡会議を開催

歩道等の工事は、歩く人の便宜を図るためではなく、自然を犯さず、山や森を守るための歩道をつくらなければならない。

九月二十九日、当保全センターと環境省屋久島自然保護官事務所との共催で、世界遺産等の保全に関する地元の関係者や有識者による「第五回屋久島・世界遺産等調査研究推進地域連絡会議」が屋久島世界遺産センターで開催されました。

会議では、各団体から平成十四年度の調査研究実績及び平成十五年度の調査研究計画が報告され、今後の屋久島の森林の保全のあり方、ガイドのルール作り、地元と連携し

たエコツアーリズムの推進等について意見が出されました。特に「歩道等の工事は歩く人の便宜を図るためではなく山や森林を守るための歩道が望ましい」との意見が出され、「当保全センターとしても、現在までも自然景観に配慮しながら工事等を実施しているし、今後もそのようにしたい。」と回答しました。

最後に、今後のこの連絡会議のあり方について、会議の構成員に専門家を増員すること、ボランティア事業の情報

意見交換の推進、調査研究等に関する情報収集及び提供などが確認されました。

## 森林環境整備協力金について

近年、都市化による身近な自然の減少、余暇時間の増大等により緑とのふれあいや安らぎを求める動きが高まっており、これに伴い自然休養林等レクリエーションの森の利用者も年々増加しています。

このために利用者の協力を得て、レクリエーションの森における歩道や看板などの設備を充実整備し、良好な森林空間を保全、維持することを目的に、森林環境整備推進協力金を収受しています。

平成十四年度は全国二七七箇所、九州では七箇所収受されています。

## 静岡森林大学校の県外研修を受け入れ

九月二十六日、ヤクスギランド（自然休養林）及び紀元杉において静岡県立農林大学校の学生六名、引率教官一名の県外研修が実施されました。

この大学校では、二年生を対象に毎年優れた林業地や先進的な事例を学ぶため県外研修を行っており、今年度は世界自然遺産に登録された屋久島の森林、林業を学ぶために

## 屋久島の植物



オオキダチハマグルマ  
きく科

鹿児島県大隅半島の佐多と屋久島以南の南西諸島の海岸近くに分布するつる性の多年草。葉は幅7cm、長さ13cmほどと大きく、茎は樹木にもたれかかるようにして伸び上がり、高さ3m以上に達するものも見られる。七月十一月に黄色の花を咲かせる。

## 屋久島世界遺産地域連絡会議を開催

九月三日、屋久島世界遺産地域連絡会議が、九州森林管理局、環境省九州地区自然保護官事務所、鹿児島県関係四課、上屋久・屋久両町、屋久島環境文化財団の参集を得て、鹿児島市で開催されました。

最初に、「屋久島世界遺産地域における平成十四年度事業実績及び平成十五年度事業計画」について、各関係機関からそれぞれ報告があり、次に「屋久島の世界遺産地域の管理の課題と対応策の方向性」に関し、全島的な利用情報提供計画など、早急に取り組むべき課題について、今回の事務局である九州森林管理局より説明がありました。

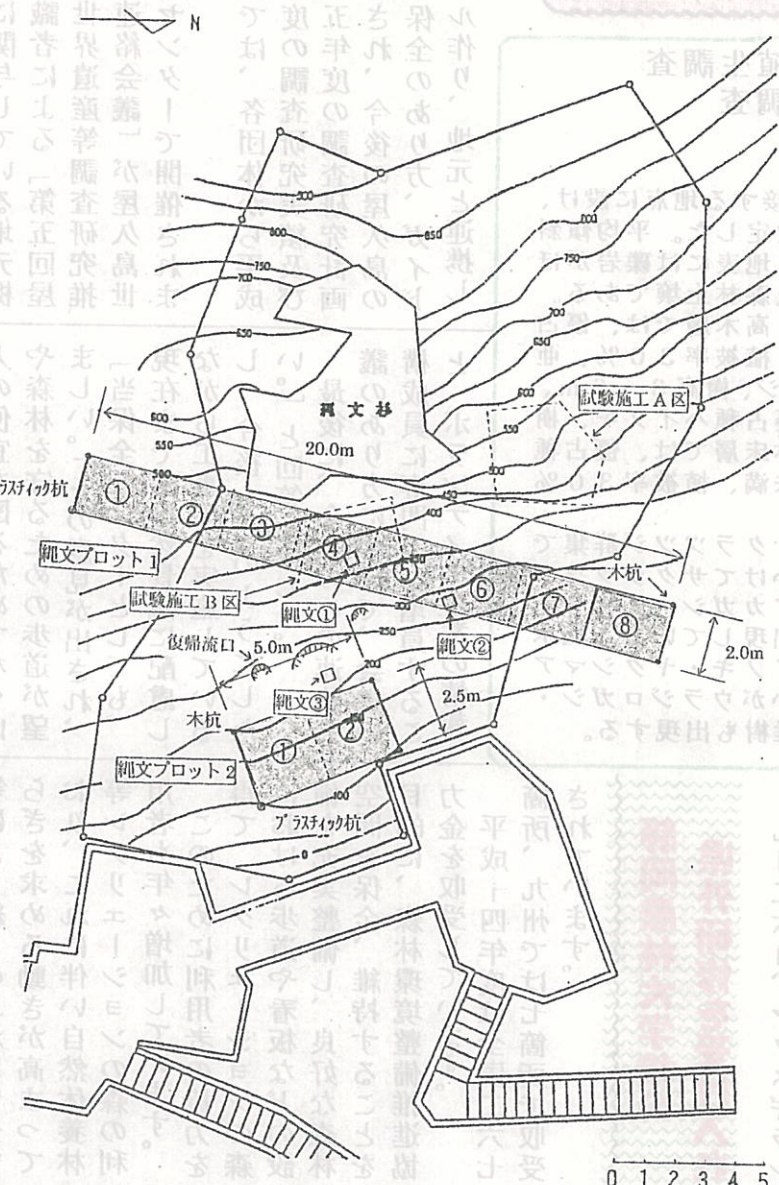
最後に、鹿児島県から平成十五年十月二十八、二十九日に開催予定の「世界遺産登録十周年記念シンポジウム」の内容説明があり各関係機関へ後援等の協力依頼がありました。

# 縄文杉周辺の植生回復調査

平成10年～11年度に実施した、縄文杉の樹勢及び植生回復事業のその後の調査を行いました。調査内容は周辺植生及び周辺土壌の回復状況です。下表は、平成10年11月に行われたベルトランセクト法による植生調査の結果と今回の調査結果とを整理しまとめたものです。

調査・調査の調査結果を掲載

自然がもたらした山や谷間の風景を回復させるには、人の手による植生回復が必要である。



平成10年と14年との木本本数の経年比較 (縄文プロット1 [2×20m] : 樹木の自然進入箇所)

ブ ロ ッ ク	平成10年11月調査 樹種：本数	平成14年11月調査 樹種：本数	経 年 比 較
①-② 編欄外 (南) [9.0㎡]	ハイノキ : 11本 ユズリハ : 14本 ヒメヒサカキ : 7本 ハリギリ : 3本 計4種35本	ハイノキ : 15本 シキミ : 5本 ヤマグルマ : 1本 ハリギリ : 1本 計6種24本	14年には、ハイノキ、シキミの本数が増えたがユズリハ、ヒメヒサカキの本数が大幅に減少した。このエリアでは種数が増え本数が減少した。樹種に関係なく樹高50cm以上の減少が目立つ。
③-⑦ 編欄内 (中央) [21.5㎡]	ハイノキ : 18本 スギ : 15本 ユズリハ : 12本 タンナサワフタギ : 5本 ナナカマド : 3本 ヒメヒサカキ : 2本 シキミ : 2本 ヒメシャラ : 1本 計8種58本	シキミ : 17本 ハイノキ : 16本 ヒメヒサカキ : 7本 スギ : 7本 ユズリハ : 5本 タンナサワフタギ : 3本 サクラツツジ : 1本 アセビ : 1本 計8種57本	14年には、シキミ、ヒメヒサカキの本数が増えたが、ハイノキ、スギ、ユズリハ、ナナカマド、タンナサワフタギの本数が減少した。このエリアでは種数・本数の変化が少ないが構成種に変化が見られた。樹種に関わらず樹高50cm以上の樹木が減少し稚樹割合が増えた。
⑧-⑩ 編欄外 (北) [9.5㎡]	シキミ : 19本 ハイノキ : 14本 タンナサワフタギ : 6本 ヒメヒサカキ : 3本 計4種42本	シキミ : 14本 ハイノキ : 12本 ヒメヒサカキ : 2本 スギ : 2本 イワガラミ : 2本 タンナサワフタギ : 1本 サクラツツジ : 1本 計7種34本	14年には、全体的な本数が減少しているものの、種数が増加した。樹種に関わらず樹高50cm以上の樹木が減少し稚樹割合が増えた。
小計 (編欄外) [18.5㎡]	計6種77本 (0.32種4.16本/㎡)	計10種58本 (0.54種3.14本/㎡)	本数が減少し、種数が増加している。
小計 (編欄内) [21.5㎡]	計8種58本 (0.37種2.70本/㎡)	計8種57本 (0.37種2.65本/㎡)	著しい相違は見られないものの、構成種に変化が見られる。
合計 [40.0㎡]	計9種135本 (0.23種3.38本/㎡)	計11種115本 (0.28種2.88本/㎡)	全体で見ると、種数が増加しているが、本数が減少している。